

2018/12/5(水)

平成30年度障害学生支援専門テーマ別セミナー

【発達障害就労支援】

話題提供 I

発達障害学生支援における セルフアドボカシー・アプローチ

富山大学学生支援センター



アクセシビリティ・コミュニケーション支援室

Hub for Accessibility and Communication Support

特命講師 桶谷 文哲

話の流れ

- 発達障害学生の意思表示とセルフアドボカシー・スキル獲得の難しさ
- 発達障害学生支援におけるセルフアドボカシー・アプローチ
- 支援事例でみるエンパワメントとセルフアドボカシー
- まとめ

配慮要請に必要な意思表示は 発達障害学生からすると・・・

🚩意思表示！

◆必要となる要素

5. 自分の困り感を理解してもらえるか不安

理解された経験

4. 窓口で上手く説明できない

説明力

3. 配慮を求める方法やルートが??

手続き情報

2. どんな配慮を受ければ上手くいくのか??

合理的配慮の
知識・情報

1. そもそも、なぜ上手くいかないのか??

特性理解

支援を受けていない場合、山頂(意思表示)までの道のりが険しく、
困りごとを抱えたまま、あきらめてしまう学生が多い

発達障害学生の「特性」にまつわる 意思表示とセルフアドボカシーの難しさ

1. 発達障害の認知特性や実行機能の障害は、障害のある本人にとって**通常の学生の得意不得意や努力不足と見分けがつきにくい**
2. 困難さが状況に依存しやすいので、配慮を受けることを、「**甘え**」や「**不公平な扱い**」ではないかと思いやすい
3. 周囲から見える配慮は、障害等があることを公表する形になり、**要請しにくい**
4. 授業担当教員に本人が直接、配慮依頼文書を渡したり、配慮を願い出る場合、**過度の緊張が起きたり、依頼のタイミングを計れなかったりする**

発達障害学生の「社会的状況」による セルフアドボカシースキル獲得の難しさ

- 初等中等教育段階まで、本人が知らないまま配慮や支援が行われることが多い
- 学生本人に困り感がない場合、周囲（親、教職員）が配慮を性急に求めがちで、支援者も配慮要請に関する**本人の主体性を軽視しやすい**
- 障害理解が進んでいない社会（大学・企業）では、小手先のセルフアドボカシースキルでは通用しない

セルフアドボカシースキル獲得における 大学の役割

大学は、支援を通じて本人が経験的に自身の特性や必要な配慮を学ぶことができる機会を数多く提供することが重要。

発達障害学生支援における セルフアドボカシー・アプローチ

セルフアドボカシーとは

- セルフアドボカシーとは、生活上の障害や困難のある当事者が、自分の利益や欲求、意思、権利を自ら主張し、自分自身、または他者のために権利擁護活動を行うことである。
- 本来、アドボカシーは、当事者の「声」や「意思決定」への支援であり、彼ら自身の権利の実現を目指している。そうであるならば、第三者に権利の保護を求めるのではなく、たとえ小さくても彼ら自身が「声」を出して、主張し、自らの権利を勝ち取ろうとする活動は、権利擁護の原点といえる。

高山直樹、川村隆彦、大石剛一郎編著
『福祉キーワードシリーズ 権利擁護』2002年、中央法規)

セルフアドボカシー獲得における 支援者の役割

- 自己理解が進んでいない段階で、セルフアドボカシーの原義的な意味である“権利の主張”という側面が先行すると…
- 要望(配慮)の妥当性が上手く伝わらず、結果的に「(周囲に)理解されない」というマイナス経験を重ねやすい

学生本人の主体性を尊重しつつ
自己理解を促進し、
同時に配慮提供者(部局)の障害理解を促進する
支援者の存在が重要となる

学部教員・職員
教養教育担当教員・職員
実習担当教員

修学

- 履修・スケジュール管理
- 受講時の合理的配慮に関する調整
- レポート・卒論サポート
- 実習サポート

教育・学生支援機構 学生支援センター
アクセシビリティ・コミュニケーション支援室

サポート・チーム全体のマネジメント

- 体調を考慮しながらの修学支援

メンタル

【学内】
保健管理センター
【学外】
地域医療機関

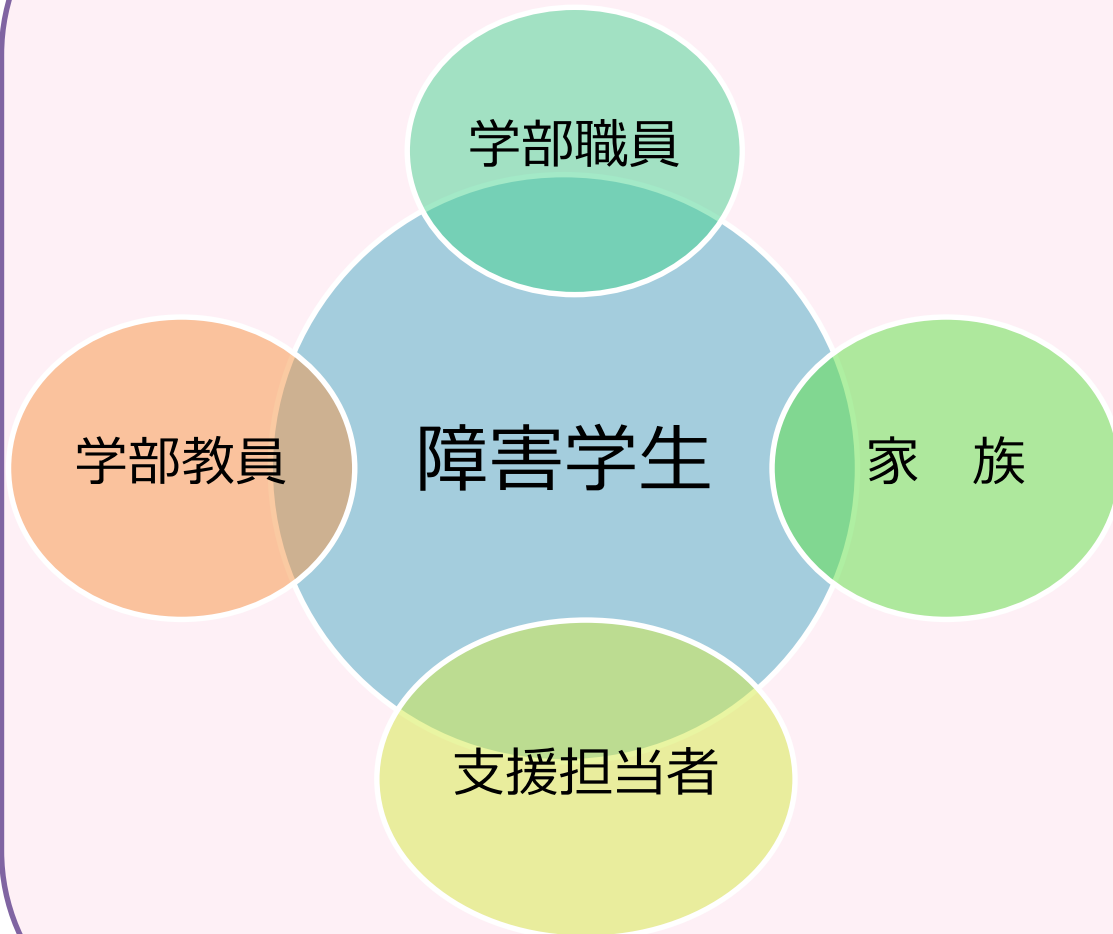
カウンセリング
体調管理
服薬指導

【学内】
就職キャリア支援センター
【学外】
地域就労支援機関
公共職業安定所
就労移行支援事業所
地域障害者職業センター

キャリア

- 就職活動スケジュール管理
- 自己PR・志望動機等作成サポート
- 面接に関する事前・事後サポート

修学支援における知識創造の場



プロジェクト型・チーム支援

■ 場

- 知識とは、それが独立して存在し得るものではなく、つねに人々によって共有される文脈としての「場」に埋め込まれた形で存在する。
- 個人としての「知識」が、組織としての「知識」となることが重要であり、「組織知」として蓄えられ、それを有効に利用することが重要である。

発達障害学生に対する社会参入支援

学生が新しい環境(社会)へ参入するプロセスを一貫して支援する

I 期

(高校生～大学1年前期)

事前相談
チャレンジレッジ
大学適応

II 期

(大学1年後期～3年)

大学生活
修学
コミュニケーション

III 期

(大学3年後期～4年)

卒論
ゼミでの適応
就職活動

IV 期

(卒業後)

就職活動
職場適応
フォローアップ

修学支援

就職支援

卒後支援

自己認識・意思表示を促進する支援プロセス

1. 修学上や生活上における困りごとの確認と状況整理
 - 現状を聴きつつ、過去に配慮を必要とした状況や経験を振り返る
 - 特性上、困る可能性のある修学上のイベントや科目の情報を事前に確認
 - 背景にある社会的な文脈や他者視点の補完
2. 問題の整理
 - 自己対処が可能な問題: 工夫次第で対応できる
 - 配慮が必要な問題: 試行錯誤により、適切な配慮を見つけていく
3. 配慮要請への心理的葛藤(ためらい・不安・リスクへの恐れ)に関する対話
4. 配慮依頼方法の提示
 - ①配慮内容に関する合意形成→②配慮文書の作成→③配慮文書の配布方法
5. 決定された内容のモニタリングと調整

支援事例でみる
エンパワメントとセルフアドボカシー

※スクリーンをご覧ください

まとめ

～エンパワメントを意識した支援者の関わり～

※セルフアドボカシーとは当事者の希望を起点とした自発的な行動なので、支援者ができることはエンパワメント

- 面談における主体性の尊重
 - 客観的な障害の根拠資料よりも、本人の障害に対する認識や困りごとに関する語りを聴くことを重視する
- 自己選択性の付与
 - 本人がより良い選択を自己決定できるよう、支援者は必要となる情報や選択肢を提示する
- 他者理解の機会の提供
 - 似た特性をもつ他者との緩やかな対話の場を提供し、自分の考えを伝え、他者の考えを知る機会をつくる

これらは主体的な来室（面談）の動機付けとなり、自己コントロール感の再獲得につながる

まとめ

～ 支援を通して芽生える自己認識とセルフアドボカシー～

個別面談

- ・履修の立て方(科目選択)
- ・単位取得(目に見える結果)
- ・配慮の検討
- ・スケジュール管理方法
- ・生活(衣食住や生活リズム)
- ・趣味や好きな事について
- ・教職員とのコミュニケーション
アポイントのとり方や報・連・相のタイミング
- ・職種選択、企業分析、自己分析
- ・エントリーシート・履歴書作成
- ・面接事前練習・事後振り返り

小集団活動

- ・ランチラボ
 - ・コミュニケーション・ワークショップ
- ※コミュニケーションに苦手さをもつ
仲間とのつながり

- ・得意・不得意
- ・対処法や工夫
- ・社会的スキル
- ・自尊感情
- ・他者視点

(セルフアドボカシー)
自己認識・意思表示

(資料) 自己認識・セルフアドボカシースキル獲得の 促進につながる取り組み(1)

■ 定期面談

- 一週間の修学状況を振り返り、つまづき・困りごとへの対処法や配慮の必要性について話合う
- 本人が困っていなくても、支援者との対話で問題が見つかることも多い

■ 困ったときのアポなし来室の推奨

- 困ったときにタイムリーに相談できるよう、予約なしの来室にも対応
- 自分で問題に気付き、相談に来たことを評価

■ 小集団活動「ランチ・憩・ラボ」

- 「コミュニケーションが苦手だが、克服していきたい」、「同年代の仲間とのコミュニケーションの場がほしい」といった願いを持っている支援学生に声をかけ、毎週1回(昼休み)に開催している
- 「自分の考え」や「普段から疑問に思っていること」「他の人の意見を聞きたいこと」などを話題として提案して話し合っている



ラボ・トークで使用した
カードと付箋

(資料) 自己認識・セルフアドボカシースキル獲得の 促進につながる取り組み(2)

■ チャレンジ・カレッジ

～発達障害のある生徒の大学体験プログラム～

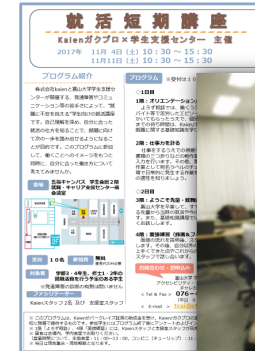
- 平成24年度より、大学進学を目指す発達障害のある高校生のための大学体験プログラムを実施
- 「先輩の体験に学ぶ～発達障害のある先輩のエピソード～」として、発達障害のある支援学生が登壇し、自らの体験を語るとともに自分の得意と不得意を認識しながら、将来の自立に向けた展望を語る
- 先輩として登壇する支援学生は、自分自身の体験をライフストーリーとして、まとめあげることで、自分の成長を確認することができる



(資料)自己認識・セルフアドボカシースキル獲得の促進につながる取り組み(3)

■発達障害学生への就職短期講座

- 支援学生(既卒者含む)の自己理解を深め、就労に向けての次のステップの理解をサポートすることを目的とした、2日間の講座を高機能発達障害者に特化した就労移行支援事業所とのコラボで開催
- 講座「ようこそ先輩」では、既に働いている発達障害のある卒業生から、就職までの経緯や働いて感じることなどを聞くことで参加学生の働くことへの不安が下がるなど、これから就職に向かうためのよいロールモデルとなっている



■チャレンジ・ワーク

～発達障害のある学生の職場実習体験プログラム～

- 平成25年度より、高機能発達障害者に特化した就労移行支援事業所の職業体験実習の機会を支援学生に提供している
- 5日間のスケジュールで、他の利用者と共に模擬職場で働くことを経験した後は、学生及び職業訓練スタッフに振り返りのインタビューを行っている

